

平成31年度

一般入学試験A日程 学科試験問題

国語

1. 試験時間は、2教科合わせて120分間です。
2. 問題は、この冊子の1～20ページにあります。解答用紙は別に2枚あります。
3. 解答は、解答用紙の問題番号に対応した解答欄に記入してください。
4. 問題や解答を、声に出して読んではいけません。
5. 印刷の不鮮明、用紙の過不足については、申し出てください。
6. 問題や解答についての質問は、原則として受け付けません。
7. 終了の合図があったら、すぐ筆記具を置いて、解答用紙を机の上に伏せてください。
8. この問題用紙は、持ち帰らないでください。
9. 不正な行為があった場合は、解答をすべて無効とします。
10. 答案の文字は、ていねいに、かつ明瞭正確に書いてください。
11. その他、試験の進行については、監督者の指示に従ってください。

植草学園大学 保健医療学部

受験番号		氏名	
------	--	----	--

第一問 次の文章を読んで、後の問い（問1〜6）に答えなさい。

《ある控えめな男のためにお祝いの会が開かれた。集まった人々は、ちよūdい機会とばかり、てんでに自慢をするやら、褒め合いをするやらで時間の経つのを忘れた。食事も終わろうという頃になって人々が気がついてみると——当の主人公を招くのを忘れていた。》

こういう話がチエーホフの『手帖』のなかに出てくる。主人公をそつちのけにして賑わった祝賀会の奇妙さ、理不尽さを描いたものだ。大きな転換期を迎えて、近年いよいよ明らかになってきているアキセイのさまざまな理論や学問と現実とのずれを見てみると、この話を思い出してしまう。

ただし、ここで厄介なのは、この《現実》というのが、直接に素手で掴めるように、どこかにころがつているものではないことである。だからこそ、その存在を浮かび上げさせ、できるだけ立ち入って捉えるためには、工夫を凝らす必要がある、いろいろな理論や方法が考え出されたのであった。たとえば、《事象そのものへ》をなよりのモットーにした《現象学》の方法が、イセイイチに練り上げられ、実践に際して細心の注意を必要とされるのは、そのいい例である。他方、肝心の《現実》の方はまことに控えめなので、いざとなってその不在がはつきりするまでは、その不在がわからない。そのこともこの話の主人公と同じである。

さて、そうしたさまざまな理論、学問、方法のなかでもっともパワフルで厚く人々に信頼されてきたのは、いうまでもなく《近代科学》である。近代科学というと、誰でもわかった気になる単純さがあるけれど、実は多くの要因から成る複雑な構成体である。その点はあとで詳しく述べることにして、いまは単純化して理解していただいていい。この近代科学ほど、人類の運命を大きく変えた人間の所産はほかに例がない。あまりにつよい説得力をもち、この二、三百年來文句なしに人間の役に立ってきたために、私たち人間は逆に、ほとんどそれを通さずに《現実》を見ることができなくなってしまったのである。

もつとも、《現実》とのずれが見やすく、次第にはつきり気づかれるようになったのは、自然科学そのものではなく、基本

的に自然科学をモデルにして科学性をめざしてきたさまざまな形態の社会諸科学であった。そのなかには、科学性を政治的にも旗印にして〈科学的社会主義〉を唱えたマルクス主義の社会理論も含まれている。マルクス主義の社会理論の場合には、ソヴィエトや東欧諸国のドラスティックな自由化のなだれ現象によって、^A現実への妥当性について答がはつきり出るという結果になったけれど、もっと地味なほかの社会諸科学の理論の場合にも、人々の心を捉えきれなくなってきたり、またなによりも、現実とのずれは否定しがたくなってきている。

（そのことを率直に認めて社会科学の再建をはかった貴重な企てとして、A・メルツチの『現在に生きる遊牧民』での考え方を取り入れた山之内靖の論文「システム社会の現代的位相」『思想』一九九一・六一七がある。そのなかで山之内は、人間の感覚は頼りがいがなく、理性によってこそ背後にある確実な構造が認識可能になるのだ、という一般的前提は変更を迫られ、それに代わって社会理論においても〈身体的経験にもとづく認識に新たな意味が生じてくる〉、と言いきっている。なお、精神分析医として社会活動もしたメルツチの理論中には、山之内も指摘しているように、私の〈臨床の知〉に通じる考え方がある。）

社会諸科学にくらべると、近代科学の中枢をなす自然科学の方は、現在でもまだ依然として有効性が大きいから、〈厳密科学〉（精密科学）としてのその有効な部分だけ見て、^B現実や人間経験とのずれの方を見ない人、見たがらない人が、まだ圧倒的に多い。しかし、近代科学の自然観が、自然をもっぱら人間のために役立たせる技術的開発の対象としてきたこと、したがって生態系つまりは地球環境の破壊をもたらすに至ったことはいまや明白であろう。また、高度に自然科学化し、技術化した近代医学が、たとえば集中治療室などに象徴されるように、医療の現場において、人間らしい患者の扱いからいよいよ遠ざかることになり、関係者だけでなく社会全体にウシンコクな反省を迫ってきていることも周知のとおりである。

では、一般的にいつて、近代科学が無視し、軽視し、果ては見えなくしてしまった〈現実〉あるいはリアリティとは、いったいなんだろうか。これもいまこの〈序文〉では、大ざっぱに言うておくしかないが、その一つは〈生命現象〉そのものであり、もう一つは対象との〈関係の相互性〉（あるいは相手との交流）である。この二つは互いに結びついているが、ここでは一応分けて扱っておこう。

あるいはひとは、生命現象だったら近代科学は十分扱ってきたではないか、と言うかもしれない。たとえば、分子生物学

やそれにもとづいた（ヒト・ゲノム）（人間の遺伝子）研究のような輝かしい成果があるのだから、と。けれども、操作主義の極致としての分子生物学が捉えているのは、原子論的に分子のレヴェルに還元された生命体の要素とその機械論的な組み合わせであって、生命現象そのものでも、生命現象の固有の、あるいは少なくとも特徴的な働きでもない。したがってそこでは、生命現象のもたらす意味の発生、自律的な振舞い、自己創造などが真つ向から扱われることがないのである。

なお、〈生命現象〉の重視に対して、「生命」の偶像崇拜」と名づけられた批判が、I・イリイチによってなされていることを私も知らないわけではない。それについては、のちに第I章第2節の終わりで論じることにする。

〈関係の相互性〉についても、現代物理学の量子論において、すでに、観測データは観測のための光や観測者の存在によって変化を被ることが着目されていること、ウィーナーに始まるサイバネティクス理論においてフィードバックというかたちで出力および入力エネルギーの相互性が問題にされていることなどから、その問題が自然科学のうちに取り込まれてきている、と言う人があるかもしれない。このような傾向は、エタイシヨウを拡張すると同時に方法そのものを問いなおす自然科学の展開としては注目に値するけれども、その方向と延長で扱われるのは、人間経験のなかでは限られた範囲での、関係の相互性にすぎない。

それにしても、^c近代科学がこれほどまでに人々に信頼され、説得力をもったのは、なにゆえであろうか。古今の数ある理論や学問のなかで特別の位置を占めたのは、なにゆえであろうか。その点についての議論も、のちに本論中で詳しく展開するが、あらかじめ私見の輪郭を披露しておこう。すなわちそれは、一口で言えば、近代科学が十七世紀の〈科学革命〉以後、〈普遍性〉と〈論理性〉と〈客観性〉という、自分の説を論証して他人を説得するのにきわめて好都合な三つの性質をあわせて手に入れ、保持してきたからにはかならない。これらの三つの性質は、それまでの多くの理論にも個別的には見られたものの、互いに相容れず、両立できないと見なされていた。ところが、近代科学の誕生においてはじめて、それらは、結びつけられ、統一されることによって異例の力を発揮するようになったのである。

まず〈普遍性〉とは、理論の適用範囲がこの上なく広いことである。例外なしにいつ、どこにでも妥当するということである。だから、そのような性格をもった理論に対しては、例外を持ち出して反論することはできない。原理的に例外はないのだから。次に〈論理性〉とは、主張するところがきわめて明快に首尾一貫していることである。理論の構築に関し

ても用語の上でも、多義的な曖昧さを少しも含んでいないということである。したがって、そのような性格をもった理論に対しては、最初に論者によって選ばれた筋道によってしか、問題が立てられず、議論できないことになる。最後に〈客観性〉であるが、これは、或ることが誰でも認めざるをえない明白な事実としてそこに存在しているということである。個々人の感情や思いから独立して存在しているということである。だから、そのような性格をもった理論にとつては、物事の存在は主観によっては少しも左右されないということになる。

しかしながら、〈現実〉とは、このように近代科学によって捉えられたものだけに限られるのだろうか。というより、このような原理をそなえた理論によって具体的な現実が捉えられているだろうか。否であろう。むしろ、近代科学によって捉えられた現実とは、基本的には機械論的、力学的に選び取られ、整えられたものにすぎないのではなからうか。もしそうだとすれば、近代科学の〈普遍性〉と〈論理性〉と〈客観性〉という三つの原理はそれぞれ、なにを軽視し、無視しているのだろうか。それらは、なにを排除することによって成立しえたのだろうか。そこでこんどは、そのことを考えてみる必要がある。

(中村雄二郎『臨床の知とは何か』より)

* 出題の都合上、原文の一部分を改変してあります。

問1 傍線部ア～エのカタカナで示した語と同じ漢字を書くものを、それぞれ後の1～4の中から一つ選びなさい。

ア キセイ

- 1 キセイをそがれる
- 2 キセイを発する
- 3 お盆にキセイする
- 4 キセイ概念

イ セイチ

- 1 偉人のセイチを訪ねる
- 2 キリスト教のセイチ
- 3 セイチを極める
- 4 土盛りしてセイチする

ウ シンコク

- 1 確定シンコクをする
- 2 シンコクな事態におちいる
- 3 器物損壊罪はシンコク罪である
- 4 日本はかつてシンコクと自称した

エ タイショウ

- 1 攻撃のタイショウとなった
- 2 左右タイショウに作る
- 3 競技会でタイショウを獲得した
- 4 原文と訳文をタイショウする

問2 空欄に最も適する文を、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 集まった人々にあたるのは、常連のさまざまな華々しい〈現実〉であり、主人公にあたるのは理論や学問である。
- 2 集まった人々にあたるのは、常連のさまざまな華々しい理論や学問であり、主人公にあたるのは〈現実〉である。
- 3 控えめな男の祝いの会を主催した人にあたるのは〈現実〉であり、集まった人々にあたるのは理論や学問である。
- 4 控えめな男の祝いの会を主催した人にあたるのは理論や学問であり、集まった人々にあたるのは〈現実〉である。

問3 傍線部A「現実への妥当性について答がはつきり出るといふ結果になった」とありますが、どのような結果が出たと考えられますか。最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 現実への妥当性が考慮された。
- 2 現実への妥当性が無視された。
- 3 現実への妥当性が肯定された。
- 4 現実への妥当性が否定された。

問4 傍線部B「現実や人間経験とのずれの方を見ない」とありますが、このことによつてどのようなことが起こりましたか。次のi・iiについて、それぞれ本文から二十五字以内で抜き出しなさい。

- i 自然科学の分野
- ii 近代医学の分野

問5 傍線部C「近代科学がこれほどまでに人々に信頼され、説得力をもったのは、なにゆえであろうか」とありますが、筆者が考える理由を説明した文として最も適するものを、次の1〜4の中から一つ選びなさい。

- 1 〈普遍性〉と〈論理性〉と〈客観性〉が結びつけられ統一されて異例の力を発揮したから。
- 2 〈普遍性〉と〈論理性〉と〈客観性〉が互いに相容れずに両立できないとみなされたから。
- 3 〈普遍性〉と〈論理性〉と〈客観性〉がそれぞれ他人を説得するのに好都合であったから。
- 4 〈普遍性〉と〈論理性〉と〈客観性〉が理論や学問のなかで特別の位置を占めていたから。

問6 傍線部D「近代科学の〈普遍性〉と〈論理性〉と〈客観性〉という三つの原理はそれぞれ、なにを軽視し、無視しているのだろうか。それらは、なにを排除することによって成立しえたのだろうか」とありますが、軽視・無視・排除されなかつたと考えられるものを、次の1〜4の中から一つ選びなさい。

- 1 生命現象
- 2 現実や人間関係
- 3 明白な事実
- 4 関係の相互性

第二問 次の文章を読んで、後の問い（問1〜7）に答えなさい。

作家・井伏鱒二氏に、ファンレターを送った。上高地の絵葉書に、私のものなど読まない方がよいですよ、と記されて返事がきた。

私は、先生のご機嫌を損じたようである。そう感じた。あんな手紙、出さなければよかった、と悔いたが、あとの祭と
いうものである。

私は先生の文章の非を打ったのである。なんと大それた真似をしたものであろう。先生の誤字を指摘したのである。ファンレターといえるものではない。

先生のご返事をなんとしてもいただきたい、という下心があった。それで質問の形をとった。質問の内容がよくない。揚げ足取り、である。

なぜこんな手紙を書いたか。書く気になったか。実は伏線があった。

私は中学時代、いろんな新聞や雑誌に、作文や詩歌を投稿していた。ある時ひどくセンチメンタルな詩が入選し、雑誌の巻頭に掲載された。するとNという同年の女生徒から、ファンレターをもらった。それがきっかけで、Nとは以来ずっと文通を続けていた。彼女は大阪の名門私立高校に通っていた。手紙のやりとりだけで、会ったことはない。

そのNが、口ごもるような口調の手紙をよこし、あなたの文章は誤字が多く読みづらい、というのである。異性に注意されて、私は度を失った。こんな恥ずかしいことはなかった。顔から火がでる思いだった。

しかしNは優しかった。自分にも間違いがあるはずだ。気づかずに独りよがりを書いていくかも知れない。今度お互い
に間違いを教えあいましょう。良い勉強になるはずだ。そう言って慰めてくれた。

Nのおかげで、私は慎重に文をつづるようになった。うる覚えの文字は、いちいち辞書に当って記した。私は『広辞苑』
を一ページから読んでいたくせに、言葉の意味を知ることには夢中で、文字の形を見るのを疎かにしていたのである。

勉強のつもりでNの手紙を読むと、Nにも誤字や当て字が結構あった。私が勇んでそれを正すと、ありがとう、恥ずかしいけど嬉しかった、遠慮なく注意してね、とすぐ返事がきた。

毎回のようにNのそれには、必ず一字か二字の誤りが見つかった。時に、同じ文字がくり返されたので、私はNの粗相と怠惰を叱責した。私の方では、ほとんど彼女の指摘を受けることはなくなっていた。あなたには負けました、私はまだまだ勉強が足りない、でも気をゆるめないうで監視しあいましょう、と返事がきた。

その返事にも、一字、誤字があった。ここに至って私はNの作意に気がついたのである。彼女は、さりげなく私を教育してくれていたのだ。

それはともかく、Nの提言以来、私は用字法に非常に細心になった。すると当然ながら、人の欠点が目につくようになった。

井伏鱒二氏の文章を書き写して、至るところに非を見つけたのも、そのようなノミ取りまなこの折だったのである。創元社刊の『井伏鱒二作品集』第四巻の収録作を槍玉に上げた。

さきごろ、この作品集を入手した。一冊ずつ、なつかしい思いでページをくついていた。第五巻をめくっていたら、一枚の紙片がはさまっている。いわゆる正誤表である。

何気なくのぞいて、アッ、と驚いた。正誤表は、第四巻についてのものだったからである。

「お詫び 前回配本いたしましたこの作品集の第四巻に、多くの誤植がございましたことは、御購読下さつてゐる皆様及び著者に対しまして誠に申し訳なく、謹んでお詫び申し上げますとともに、左の如く夫々訂正させていただきます。尚、三巻までの分にはこの様なことはなく、今後発売の分につきましては、特に校正を厳密に致します事を、併せてここに申し上げます次第でございます。」との口上のあと、あるわあるわ、計四十六箇所もの誤りが正されている。

井伏氏が間違ったのではない。校正者が手を抜いたためのミスである。三巻までの分には誤植がない、というから、この巻に限って何事か手違いが生じたのであろう。それを知らずに、私は井伏氏を論難した。知らぬことはいえ、浅はかな所行であった。井伏氏は不快であつたらう。

正誤表をながめているうちに、私は思ひだした。

たとえば「丑寅爺さん」の小説で、「子供が学校で、ほかり子供から妙な目で見られるのが可哀さうだと云ふのである。」という文章があるが、「ほかり子供」の意味がわからない、と私は井伏氏にたずねたのである。

正誤表によれば、これは「ほかの子供」の間違いで、単純な誤植なのであった。

他に、「聚落第」とあるが、「聚楽第」が正しい表記ではないか、と私はDしたりげに書いた覚えがある。正誤表に、それもちゃんと出ている。

つまりこういうことだった。私がテキストに用いた古本の『井伏鱒二作品集』には、正誤表がついていなかったのである。一枚の紙きれであるから、本書の旧蔵者が粗末にしたのであろう。古本をテキストに使うと、こういう思わぬ落とし穴があるわけだ。

正誤表で思いだした。そのころ誤植のある本だけを集めている伊東さんという客がいた。

どうやってそういう本を見つけるのか、と聞くと、正誤表の有無で判断するしかない、と苦笑した。巻末についていたり、はさみこみのチラシである。しかしこれのついてる本は、よほど良心的で、多くは恥をおおやけにしたがらない、と語った。

伊東さんは校正を職としている方で、そうと聞けば誤植の本の収集も決してF奇矯ではない。

三十代のなかばであったか。一度遊びにおいで、と誘われた。月島の一丁目だったか二丁目だったか、裏通りの仕舞屋しもたやの二階に間借りしていた。

格子戸を開けると、老人夫婦が食事をしていた。二階にあがると、伊東さんも食事をしている。私は時分どきに訪ねたのではなかった。

「この家は昼食が十一時なのだよ」伊東さんが小声で言った。「年よりに合わせないと機嫌が悪いのだよ」とつけ加えた。賄い付きの下宿らしい。お菜は里芋の煮ころばしであった。伊東さんがなんだか偉く老けて見えた。部屋中、本だらけである。全部、誤植の本である。

三十代の女性があがってきて、茶を入れてくれた。階下の娘と名のつた。「嫁に行ったがうまくいかなかったらしい」と伊東さんが、女性が降りたあとと急いでささやいた。

その次に遊びに行ったら、伊東さんは階下に住んでいた。老夫婦と、住いを交換したという。「何しろ本が重くてね。二階がミシミシいうものだから」そうだろう、大層な量である。

そこに例の娘さんが出てきて、茶を入れてくれた。
「ワイフだ」と伊東さんが紹介したので、私はのけぞるほど驚いた。「娘さん」が引っこむと、伊東さんが腹が大きくなつたゼスチュアをした。

(出久根達郎『逢わばや見ばや』より)

*出題の都合上、原文の一部分を改変してあります。

問1 傍線部ア〜エと意味が類似した言葉を選び、太字の部分を漢字で書きなさい。

- | | | | |
|-----------------|-------------------|----------------|----------------|
| | ア | | イ |
| | 1 イ ミブカク | | 1 ケ ツジヨ |
| | 2 ガ クシキブカク | | 2 カ シツ |
| | 3 ヨ ウジンブカク | | 3 フ ソク |
| | 4 エ ンリヨブカク | | 4 ケ イハク |
| ウ | | エ | |
| 1 ポ ウリヤク | | 1 ハイ ビ | |
| 2 イ ト | | 2 キ ヨウミ | |
| 3 イ ヨク | | 3 キ ヅカイ | |
| 4 シ タゴコロ | | 4 フ アン | |

問2 傍線部A「大それた真似」の文中における意味は何か。その言葉として最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 大いに正論からずれた意見
- 2 大変よく似た感想
- 3 大家気取りの批評
- 4 大いに異なる指摘

問3 傍線部B「勇んで」とあるがなぜ勇んだのか。それを説明するのに最も適する切な言葉を、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 恥辱を受けた人にも誤字があり一矢を報いられると思って。
- 2 誤字を書くのは自分だけでないと自信を回復して。
- 3 誤字を見つけることに意味があると思えば使命感をもって。
- 4 発見が困難な誤字を見つけて達成感をもって。

問4 傍線部C「浅はかな所行であった」とあるがなぜそう思うのか。それを説明した言葉として最も適するものを、次の

1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 出し抜こうという浅慮から偉大な人を批判したから。
- 2 正当性を確かめもせず違法な行為をしたから。
- 3 しっかり判断もせず過剰の批判をしたから。
- 4 しっかり確かめもせず批判すべき相手を間違えたから。

問5 傍線部D「したりげに」とはどういう気持ちか。それを説明した文として最も適するものを、次の1～

4の中から一つ選びなさい。

- 1 得意な気持ちで。
- 2 困らせる気持ちで。
- 3 批判的な気持ちで。
- 4 教え諭す気持ちで。

問6 傍線部Eの「苦笑した」のはなぜか意味か。それを説明した文として最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 分かり切ったことを真面目に質問されたから。
- 2 正誤表の有無で判断するという自慢できる話でないから。
- 3 判断する基準が一つしかないという貧弱な話だから。
- 4 もっと深い根拠を説明したいのに出来なかったから。

問7 傍線部Fの「奇矯ではない」と判断する理由は何か。それを説明した文として最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 校正の研究のために誤植の本を収集する必要があるから。
- 2 誤植を許さぬ正義感から誤植の本に注目するのは正当だから。
- 3 校正職なので誤植の本に興味を持つのは理屈に合っているから。
- 4 その人の性格から考えて当然あり得ることだから。

第三問 次の文章を読んで、後の問い（問1～5）に答えなさい。

学校がライダー訓練所のようになってしまっても、考えてみれば、やむを得ないことかもしれない。小学校へ入ることも、まだ、勉強がよくわかっていない。ものを知りたい気持はあるけれども、どうしたら知識が得られるか、見当もつかない。

とにかく、先生に言われるように勉強しなさい、となる。ひっぱるものがあるから、動き出す。自分で動くのではない。受身だ。

本来の学習がそうであってはいけないのはわかり切っているけれども、制度としての学校ができてしまうと、各人の自発的な学習意欲を待っているわけには行かない。就学年齢がきまっている。そのときいつせいに学習への準備ができていはずはないけれども、ひっぱるのには、いつせいでないと不便だ。ひっぱられる方は、なぜ、ひっぱられているのかよくわからないままひっぱられる。

このはじめの「ア」は学校に在る間中ずっとついてまわる。強化されこそすれ、弱まることはない。そればかりか、社会へ出てからも、勉強とは、教える人がいて、読む本があるもの、と思いついでいる。

学校の最優等生が、かならずしも社会で成功するとは限らないのも、ライダー能力にすぐれていても、本当の飛翔ができるのではない証拠になる。学校はどうしても教師の言うことをよくきくライダーに好意をもつ。勝手な方を向いたり、ひっぱられても動こうとしないのは欠陥あり、ときめつける。

教育は学校で「C」。

いわゆる学校のない時代でも教育は行なわれていた。ただ、ライダー教育ではいけないのは早く気がついていたらしい。教育を受けようとする側の心構えも違った。なんとしても学問をしたいという積極性がなくて話にならない。意欲のないものまでも教えるほど世の中が教育に関心をもっていなかったからである。

そういう熱心な学習者を迎えた教育機関、昔の塾や道場はどうしたか。

入門しても、すぐ教えるようなことはしない。むしろ、教えるのを拒む。剣の修業をしようと思っっている若ものには、毎日、薪を割ったり、水をくませたり、ときには子守りまでさせる。なぜ教えてくれないのか、当然、不満をいまく。これが実は

学習意欲を高める役をする。そのことをかつての教育者は心得ていた。あえて教え惜しみをする。

じ、らせておいてから、やつと教える。といつて、すぐにすべてを教え込むのではない。本当のところはなかなか教えない。いかにも「イ」のようだが、結局、それが教わる側のためになる。それを経験で知っていた。

頭だけで学ぶのではない。体で覚える。しかし、ことばではなかなか教えてもらえない。名人の師匠はその道の奥義をきわめているけれども、はじめからそれを教えるようではその奥義はすぐ崩れてしまう。^{注1} 売家と唐様で書く三代目、というのとどこか似ている。

秘術は秘す。いくら愛弟子にでもかくそうとする。弟子の方では教えてもらうことはあきらめて、なんとか師匠のもてるものを盗みとろうと考える。ここが昔の教育のねらいである。学ぼうとしているものに、惜気なく教えるのが決して賢明でないことを知っていたのである。免許皆伝は、ごく少数のかぎられた人にしかなされない。

師匠の教えようとしらないものを奪いとろうと心掛けた門人は、いつのまにか、自分で新しい知識、情報を習得する力をもつようになっていく。いつしかグライダーを卒業して、飛行機人間になって免許皆伝を受ける。伝統芸能、学問がつよい因習をもちながら、なお、「ウ」を出しうる余地があるのは、こういう伝承の方式の中に秘密があったと考えられる。

昔の人は、こうして受動的に流れやすい学習を積極的にすることに成功していた。グライダーを飛行機に転換させる知恵である。

それに比べると、いまの学校は、教える側が積極的でありすぎる。親切でありすぎる。何が何でも教えてしまおうとする。それが見えているだけに、学習者は、ただじつとして口さえあけていけば、ほしいものを口へはこんでもらえるといった「A」心を育てる。学校が熱心になればなるほど、また、知識を与えるのに有能であればあるほど、学習者を受身にする。本当の教育には失敗するという皮肉なことになる。

そこで、おそまきながら、詰め込み教育への反省がおこる。グライダー訓練の弊害が注意されるようになったのである。詰め込みがいけないのではない。「B」をそぐ詰め込みが悪いのである。勉強したい気持がつよければ、いくらでも知識を歓迎し、いくらでも詰め込んでもらいたいと願うであろう。逆に拒否反応を示している学習者にとっては、ほんのすこしのこどもでも、こんなに押しつけられてはたまらないと反発する。

かつて、漢文の素読そどくが行なわれた。ろくに字も読めないような幼い子どもに、四書五経ししよきやうといった、最高度の古典を読ませる。読ませるといふのは正確ではない。声を出して朗誦するだけである。先生は意味をご存知だが、習う子どもには、チンプンカンプン、何のことかさっぱりわからない。

しかし、漢文の素読では、意味を教えないのが普通で、だからこそ、素読というわけである。いくら子どもでも、ことばである以上どういふことか、意味が気にならないわけがない。しかし、教えてもらえないのだから、しかたがない。我慢する。その間に、早く意味もわかるようになりたいと思う心がつる。教えないことが、かえっていい教育になっているのである。

いまのことばの教育は、はじめから、意味をおしつける。疑問をいなく、つまり、好奇心をはたらかせる前に、教えてしまふ。意味だけではない、文章を書いた作者についてもあらかじめ、こまごましたことを教えようとする。宮沢賢治はどういう信仰をもっていたかといったことをいまの高校生は教えられる。それが幸福かどうかははなはだ疑わしい。親切がすぎて、アダになっている。

昔、素読をつけられた子どもたちで、孔子や孟子の伝記を知らなくてはいけないなどと言われることはなかった。

いまの学校教育では、グライダー能力はつけられても、飛行機能力をつけにくいことはすでにくりかえしのべてきた通りである。それにもかかわらず実際には、グライダーを飛行機と「エ」する。試験の答案にいい点をとると、それだけで、飛翔力ありと「早合点」してしまう。これがいかに多くの混乱を招いているかしのれない。

考える、ということ、まず、頭に浮ぶのは数学である。与えられた問題の答を出す。これは文章を読んで、その中から知識、情報を引き出すのに比べると、いかにも自発、積極的のように見える。

おおざっぱに言うと、知る活動は、学校の国語科を中心とする読む学習にかかわり、考える活動は、数学を中心とした学習と関係するように考えられている。

数学は思考力をつけるというけれども、問題を与えられて、解答を出すのは、まだまだ受動的である。問題という枠の中でこそ「オ」的ではあるが、問題そのものは他から与えられたもので、自分で考え出したのではない。学校の数学は、いつも、はじめに問題ありき、である。自分で問題をつくり、それを解くという数学は、普通、ついに一度も経験することなくして

終る。

ギリシヤ人が人類史上もつとも輝しい文化の基礎を築き得たのも、かれらにすぐれた問題作成の力があり、“なぜ”を問うことができたからだといわれる。飛行機能力がすばらしかったのである。

文化が複雑になってくると、自由に飛びまわることが難しくなる。学校がどんどんグライダーを社会へ送り出すから、グライダーがあふれる。飛行機はグライダーにとって迷惑な存在である。創造性がやかましく言われ出したのは、わずかながら、これではいけないという^E反省が生れつつあるのを物語っているとよからう。ただ、まだ、本当の創造の方法はほとんど考えられていない。

(外山滋比古『思考の整理学』より)

*出題の都合上、原文の一部分を改変してあります。

注1 初代が築いた財産を、遊びに耽って没落させる三代目を皮肉った川柳。

問 1 空欄ア～オにはいる熟語として、最も適するものを、それぞれ1～4から一つ選びなさい。

	ア	1	練習		イ	1	陰湿		ウ	1	実力		エ	1	誤解		オ	1	創造
		2	習慣			2	不満			2	能力			2	理解			2	消極
		3	学習			3	困難			3	芸術			3	回答			3	積極
		4	風習			4	秘密			4	個性			4	混乱			4	建設

問 2 空欄A Bに最も適する二字熟語を答えなさい。

問 3 空欄Cに最も適する語句を、次の1～4のうちから一つ選びなさい。

- 1 始まったのではない
- 2 行われていたのではない
- 3 始まったのである
- 4 行われていた

問 4 傍線部 D 「早合点」の文中での意味として、最も適するものを、次の 1～4 のうちから一つ選びなさい。

- 1 飛行規則を理解したと評価してしまうこと。
- 2 優秀でない学生に高得点をつけてしまうこと。
- 3 グライダー能力を飛行機能力と錯覚してしまうこと。
- 4 こまごまとしたことをきちんと評価できていないこと。

問 5 傍線部 E 「反省」の内容として、最も適さないものを、次の 1～4 のうちから一つ選びなさい。

- 1 社会において問題提起能力が足りていないという危機感。
- 2 飛行機はグライダーにとって迷惑な存在であること。
- 3 教えすぎる教育が創造性をかえって損なっていること。
- 4 学習者の積極性を導く教育形態が十分に確立されていないこと。